

氏 名 お 尾 崎 真 理
 学位(専攻分野) 博 士 (工 学)
 学 位 記 番 号 論 工 博 第 3431 号
 学位授与の日付 平 成 11 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学 位 論 文 題 目 風土色に基づいた環境色彩計画に関する研究

(主査)

論文調査委員 教授 外 山 義 教授 中 村 泰 人 教授 内 藤 正 明

論 文 内 容 の 要 旨

わが国の今日の都市の景観をみたとき、そこには様々な素材、色彩の外壁がお互いに調和なく建ち並び、眼に痛い色の看板があふれているといった現状がある。わが国では、都市や建築の設計において、色彩はいまだ個人の「主観的な領域」として捉えられることが多く、美しく調和ある都市の色彩環境をつくりあげるために、色彩と色彩調和についての基本的な理論をふまえ、客観的かつ実際的な方法として都市の色彩設計に適用できる色彩計画の方法を体系的に示した研究は、これまでなされてこなかった。

本論文は、都市や地域環境に色彩的調和を与える基本色(色パレット)に「風土色」をおき、それと色彩群に色彩調和の基準を与える「カラーグループボード」を併用する、「風土色に基づいた環境色彩計画」の方法を研究した結果をまとめたものであり、論文は序章、本論5章、および結章からなっている。

序章では、人間はなぜ美しく、調和ある色彩環境を求めるのかの基本命題をゲーテの色彩論の哲学的論究から解き明かし、色彩調和=美は、人間の眼が普遍的に求めるものであり、色彩調和は、人間が意識して感性を働かせる注意深い観察と訓練を行うことで、人間が普遍的に経験できるものであるという、本論文の立脚する、色彩理解のための基本的視点を示している。

1章では、本論文の目的と背景を述べ、本論文の重要な柱である「風土色」の定義を行っており、長い時間をかけて「自然の力」によりつくられてきた風土の色が、都市や地域景観のなかで色彩計画を行うにあたって、色彩調和を与える基本色であることを明確に位置づけ、その「風土色」は、地域の土壌の色を基本にして、植生や花、空と水などの色から採取される自然環境の色と、歴史(伝統)的建造物、祭り、工芸品等の色から採取される歴史・文化環境の色として、採取・測色できることを示している。

2章では、色彩調和の考え方を示しており、ゲーテの色彩論と、それを芸術教育(訓練)の経験を通してカラーデザイン理論にまで発展させたヨハネス・イッテンの色彩論を概説した後、両者の色彩論に示されている、色彩効果(色彩の持つ感性的心性的作用)与える色彩対比(色彩の分極性)の中から、COOL-WARM(寒-暖)、HARD-SOFT(強-弱)の相互に独立する2対比を取り出し、それらを直交する2軸に変換して、2次元の感覚尺度で張られる座標空間を構成することで、色彩群を、各々異なった色彩調和をもたらす4つのグループ(A, B, C, D, の4象限)に分類できる「カラーグループボード」が導出できることを示し、これを本論文で提案する環境色彩計画の方法のもう一つの柱に位置づけている。

3章では、風土色調査の実施とそれに基づいた都市景観色彩ガイドの作成にまで至る、都市色彩計画の一連のプロセスを示しており、東京都江東区を対象にして、風土色の調査と現況建物の色彩調査を行い、既に都市化した地域では、現況建物群の壁面色の色相傾向を分析し、それらの色相に対応する色調(トーン:明度+彩度)の色を風土色の中から選ぶことで地域別の提案色する、都市の景観色彩ガイドラインの作成方法を示している。

4章では、カラーグループボード上に配置した「風土色」の分析から、異なる風土の違いを色彩調和の違いとして指摘で

きることを示しており、埼玉県全域を対象にした風土色調査では、共通する風土の中での各地域の特性の違いを、また米国サンフランシスコ市と岐阜県白川郷の風土色調査の比較からは、異なる国の風土の違いを、それぞれカラーグループボード上に配置した風土色群の相違、即ち色彩調和の違いとして示している。

5章では、実際の都市や建築群の色彩設計、地域景観における土木構造物の色彩設計への実践方法を、社会的な要請のあった設計事例を用いて示しており、「風土色」と「カラーグループボード」を用いた本論文の環境色彩計画の方法の、実際的な課題に対しての適用性と有効性を実証している。

結章は、本論文の結論であり、各章で得られた成果について要約している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、色彩的混乱をきたしているわが国の都市景観に対して、美しく調和ある色彩環境をつくりあげるために、客観的かつ実際的な方法として、「風土色に基づいた環境色彩計画」の方法を体系的に研究した結果をまとめたものであり、得られた成果は以下のとおりである。

- 1) 「色彩調和＝美は、人間の眼が普遍的に求めるものであり、色彩調和は、人間が意識して感性を働かせる注意深い観察と訓練を行うことで、人間が普遍的に経験できるものである」という、色彩理解のための基本的な視点を、ゲーテの「色彩論」の哲学的論究により示した。
- 2) 長い時間をかけ、「自然の力（人間の芸術行為も含む）」がつくりあげる「風土の色」が、地域固有の色彩景観に色彩調和を与える基本の色パレットであることを明示し、その「風土色」は、地域の土壌・植生・花・空と水（気候）等の色からなる自然環境の色と、歴史（伝統）的建造物・祭り・工芸品等の色からなる歴史・文化環境の色から抽出されることを、収集・測色方法を含め、実際の調査により示した。
- 3) ゲーテの色彩論、それを芸術教育（訓練）に発展させたヨハネス・イッテンのカラーデザイン理論に示されている、色彩効果（色彩の持つ感性的・心性的作用）与える色彩対比の中から、COOL－WARM（寒－暖）、HARD－SOFT（強－弱）の互いに独立した2対の対比を取り出し、それらを直交する2軸に変換して、2次元の感覚尺度で張られる座標空間を構成することで、色彩群を4つの色彩調和のグループに分類できる「カラーグループボード」が導出できることを示した。
- 4) 様々な地域で採取した「風土色」のパレットを、上記「カラーグループボード」上に配置した色彩分析により、共通する風土の中での地域特性の違い、異なる国の風土の違いを、色彩調和の違いとして指摘できることを示した。
- 5) 地域固有の「風土色」を用いることで、都市の色彩景観に調和＝秩序を与える実用的な色彩景観ガイドが作成できること、また「風土色」と「カラーグループボード」を併用する方法によって、地域に色彩調和をもたらす建築群や土木構造物の色彩設計が可能なことを、社会的実践で示し、本論文で提案する環境色彩計画の方法の有効性を実証した。

以上、要するに本論文は、都市景観、地域景観に色彩調和をもたらす環境色彩計画の理論と方法を示したものでありで学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって本論文は、博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成11年2月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。